

R18
ADULT ONLY
成人向け作品につき
18歳未満閲覧禁止

ドスケベ妖怪

ミダラガ

淫ら家のご主人様♡



ちんほいつぱい
シコりなさい♡

今日も私達で♡

悪堕ち
洗脳♡





もう私もまなも
アンタの仲間でも
何でもないの

あ♡
まな♡

気安く呼ばないで
ゲゲゲの鬼太郎

まな♡
まな♡

ねこ娘
まな
まな



同じくご主人様ラブの
ドスケベ牝オナホ妖怪
犬山まなだよ♡

マラ蔵さま
一の牝オナホ妖怪
ねこ娘♡

見て♡
おっぱいも
こんなに大きく
なったの♡

まな♡

まな♡

たろ♡

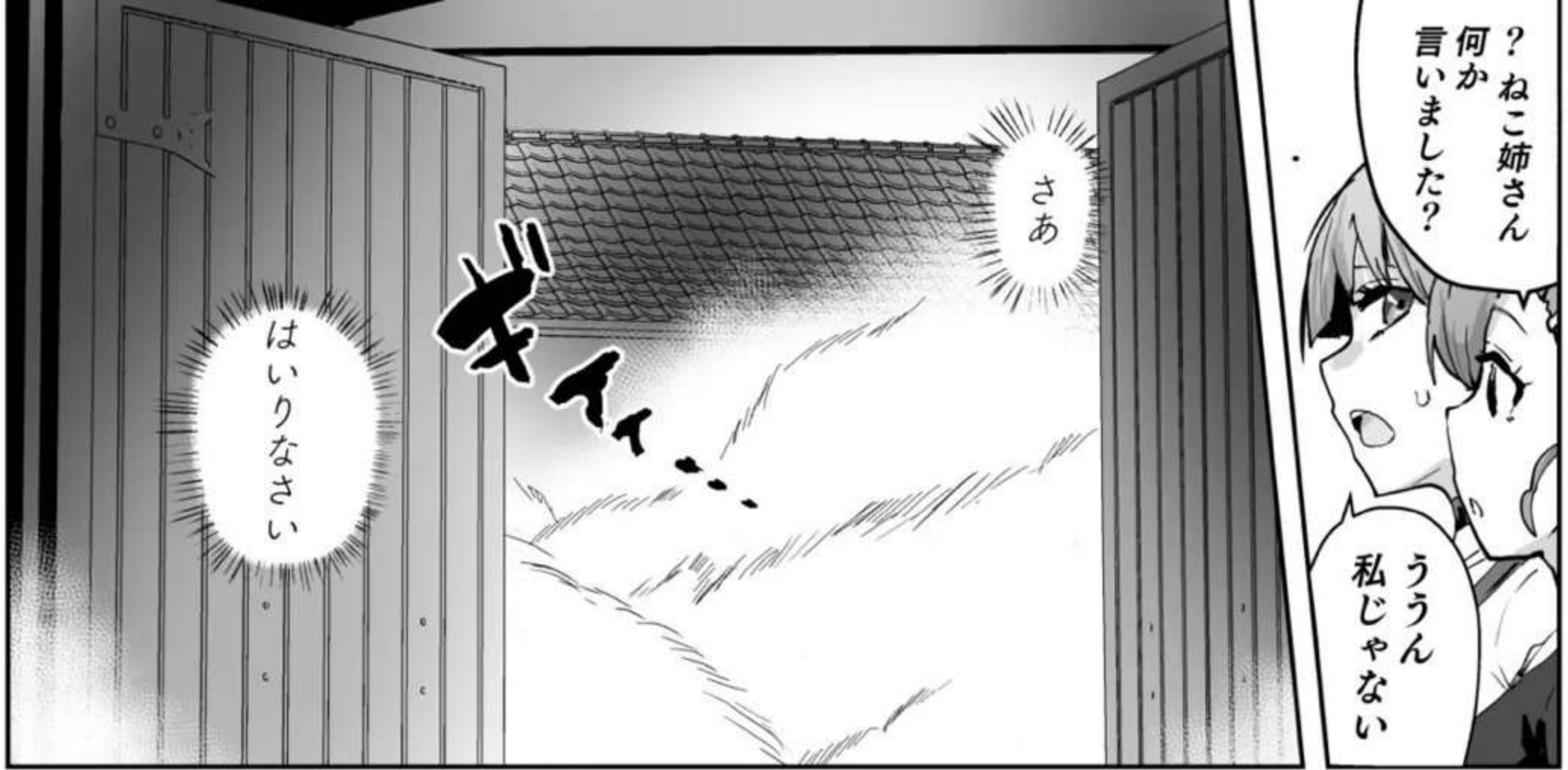
時は前…



……変ね
道間違えた？

あ、あれ？
ここに
こんなのが
あったかな？

おいで……



?ねこ姉さん
何か
言いましたか?

ううん
私じゃない





さあ服など
脱いで

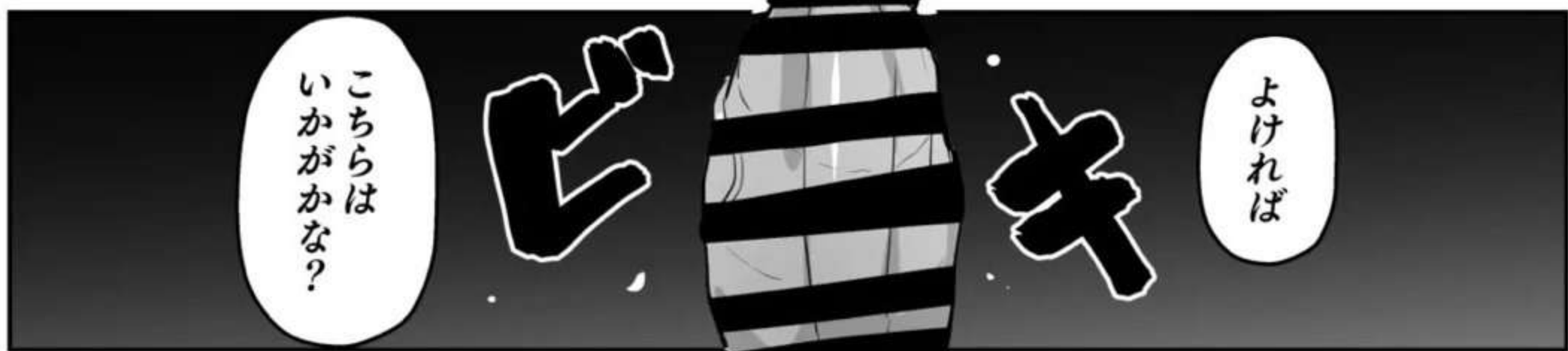
ねこ姉さんの
体っていつみても
エッチですよね♡

ぬまっ♡

自分の家だと
思っ
くつろいで下され

まなには
言われたくない
けどね♡

ぬまっ♡



よければ

ビ

キ

こちらは
いかがかな？



あは♡
えっろ♡

まっ♡

いたらき
まーしゅ♡



わあ♡
いいんですか

すごいデカ
ちんぽですよ
ねこ姉さん♡



ダメフ!!
まな

ピ

タ



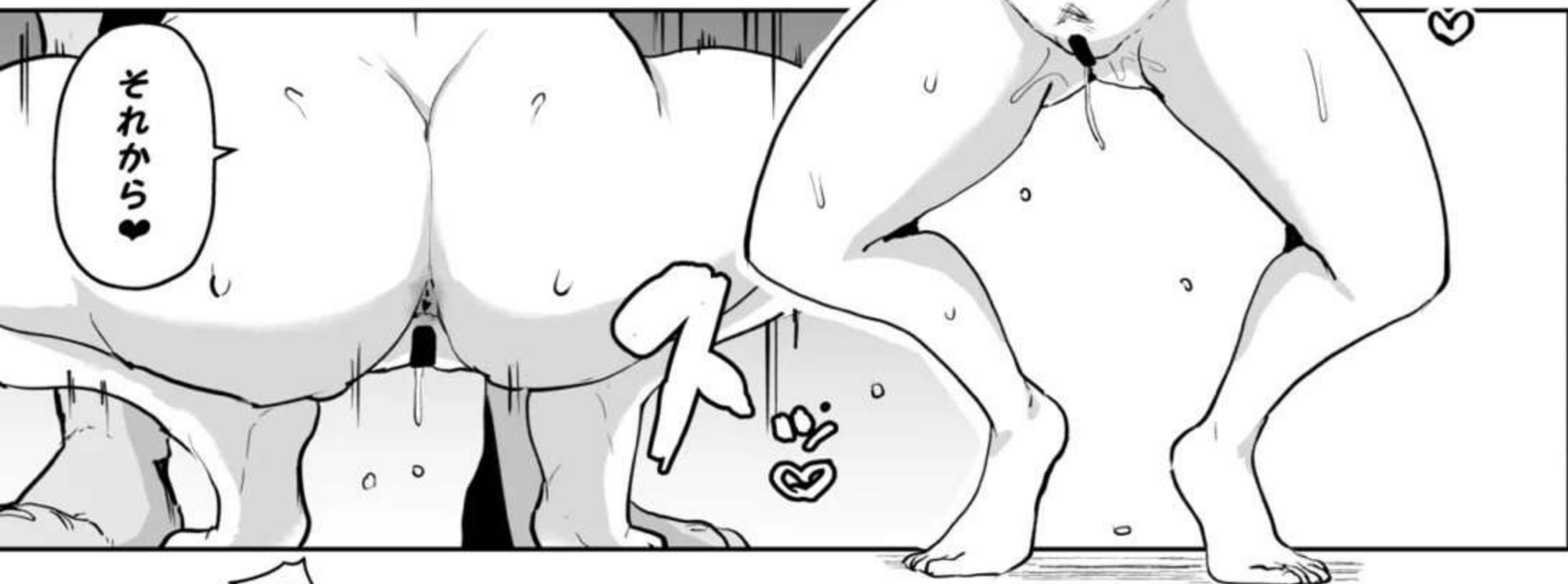


もてなされる側でも
ちんぽを頂く前の
作法はしっかり
しないとダメ♡

見てて♡んツ♡
まずこうやって
チン媚び♡

自分のまんこも
濡らしながら
おっ♡ほっ♡

ちんぽバッキバキの
ガッチガチにして
もらう♡



それから♡



いたらき
まひゅっ♡

お招きありがとう
ございまひゅ♡

おひんぽ頂いれも
よろひいれしょうか？

これはご丁寧に
どうぞおしやぶり
ください



待ちな
ひゃい♡

私が濃厚
もてなし汁
頂いてかりゃ♡



分かつら？

分かつたから
私もジュポジュポ
したいよ♡



だへ♡
ザー汁早く
飲ませへ♡

だせ♡



んもっ♡イク
おひんほ汁う♡

もてなされ
イクすりゅ
イクイク♡



だへっ♡











あそこに……♡



そうだ
いかなきゃ……♡



ほほ
いらっしやい



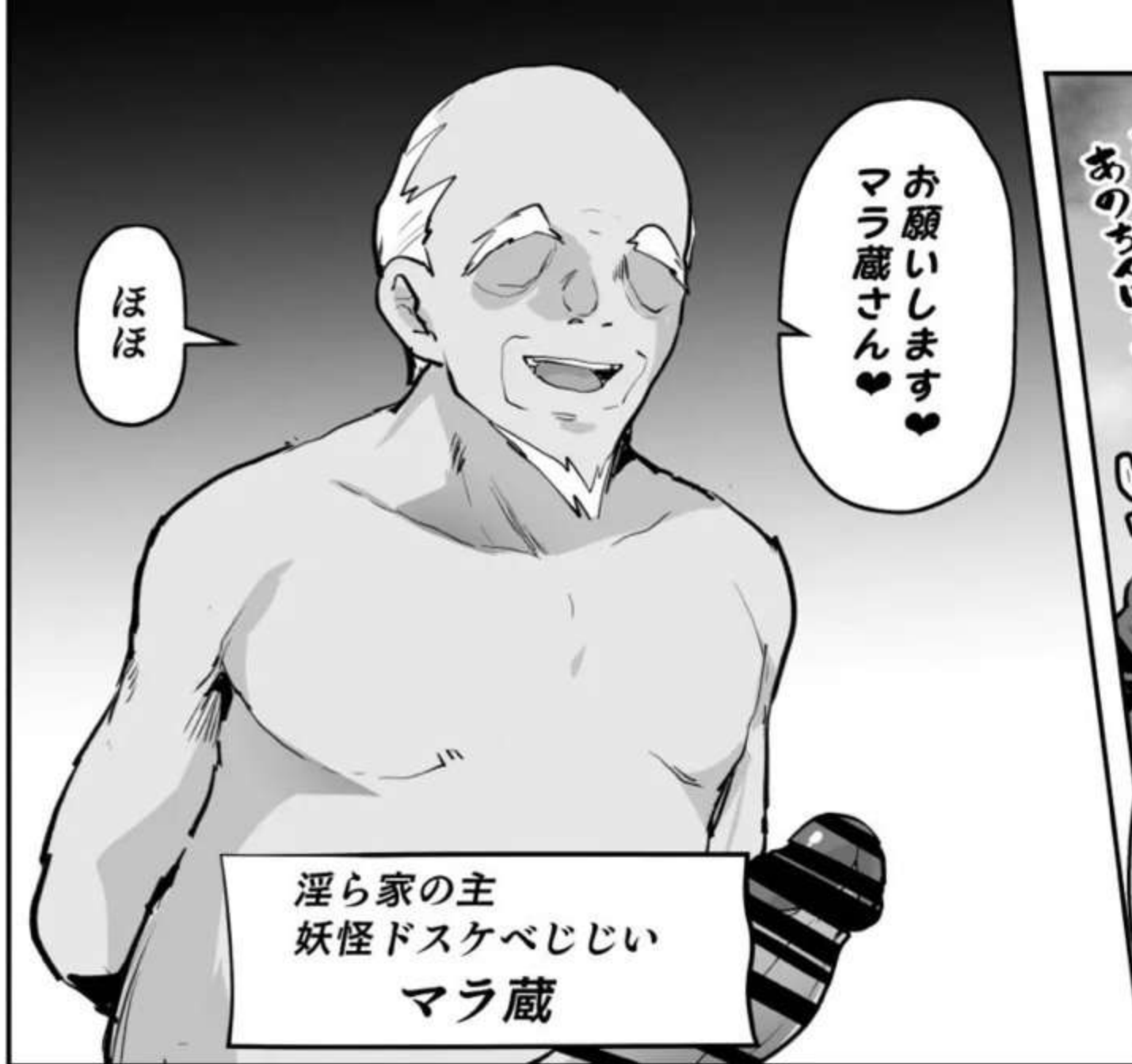
でもその……

私達なんだか
全然満足
できなくて……♡



その様子だと
お土産は
気に入ってくれた
ようじゃな

はい♡
すごく



お願いします♡
マラ蔵さん♡

ほほ

淫ら家の主
妖怪ドスケベじじい
マラ蔵



だからこの前
みたいに
私たちの
おまんこ…

生おちんぼで
ホジって
くれませんか？

おちんぼ
おちんぼ♡

はあ
大きい♡



勿論じゃ
任せておきなされ

二人ともワシなしで
いられなくなるよう

足腰立たなく
なるまで
ハメまくって
やるからの



お主らが
ここに来たのも
今回で六度目
じゃったか…



ふむ
魂の染まり具合も
いい塩梅じゃ

もう
一押しかの



ひいふうみい
よー

ごーむー



「おれちゃんぽんぽん
ほしーい♡」

「おれちゃんぽんぽん
ほしーい♡」

「では
今日で
仕上げじゃ
二人とも」

「セツワツ♡
セツワツ♡」

「カワカワ♡
カワカワ♡」



「あ……
へ……何？
わたし……」

「え……これ
ええっ!?
どうなって」



「まずは……」

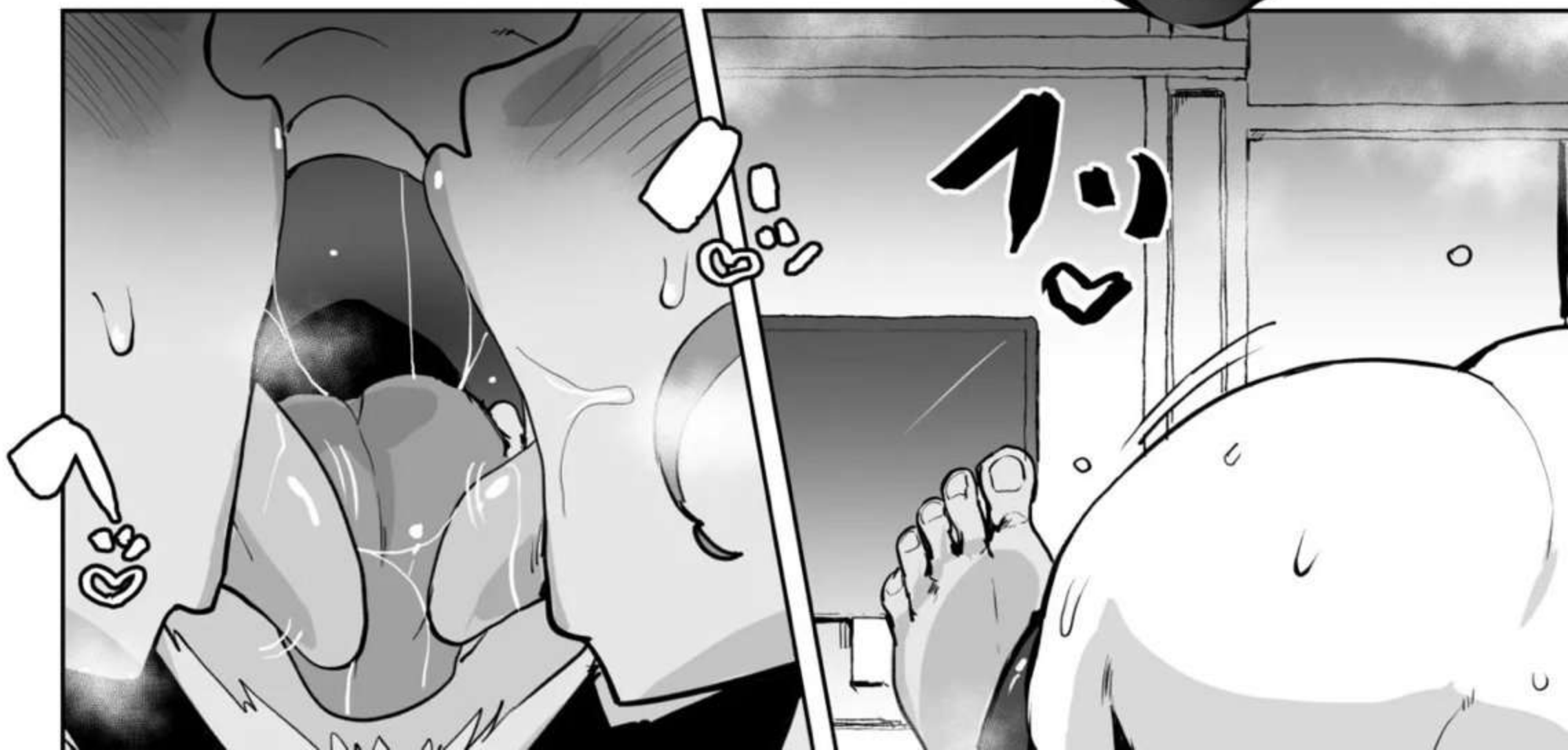
「ぬん」



「ね……
ねこ姉さん？」

「まな？」

「まな
なの？」





んも♡

ヒドイよ
こんなのお…♡

今までのこと
思い出して
きたか

ガッシュ

あんひゃ
絶対
許さないかや♡

あー♡
あー♡
あー♡



すぐに自分の
気持ちを受け入れ
られぬも道理

そして



ほほそう言いつつ
わしとのスケベを
やめようとせぬの

それはあ♡

何でなの
許せないのに
キュンキュン
とまらない♡

ガッシュ



ダメ♡この人と
ずっとペロ絡めながら
エッチしてたいって
思ってる…♡

あなたが
私たちお…♡

よいよい



スケベが
素晴らしいもの
というの

曲げられぬ
道理よ

ドスケベ
妖怪ぬきぬき
ちゃんねるへ
ようこそ♡

今日も私たちの
ドスケベセックス
垂れ流すから

金玉空っぽになる
までシコっていき
なさい♡



- ① 始まった
- ② エロねこ好き
- ③ はやくハメろ

マラゾウ
オレもハメさせて

- ① まなケツなでたい
- ② ねこ尻エツロ♡
- ③ シコります!!

あ
ん
ほ

ちよっと
まな
からのあ

勿論じゃ
ワシのあとでの

妖怪ハメかべ

わがままな
猫はケツ
叩かれて
待って

- ① 猫尻叩きたい
- ② ケツ叩かれてイクとかw



お主ら二人とも
実に幸せで
気持ちよさ
そうではないか

これは先週の
配信じゃな

顔がエロすぎる

イキ顔大好き

おへえ♥ザーメン
まんこきたあ♥
あつ♥きもひい
イクう♥



じゃが
重要なのは
そこではない



登録者
万人記念♥
ファン感謝
大乱交♥



見よ
人も妖怪も
分け隔てがない

早く飲ませ
なはい♥

いっばいちゃんほ
ドビュって
くださいね

まな・ねこ好きエロい
妖怪ちゃんねる最高
参加したかった
三人で毎日ぬいてる

う...うん♥

私達で
こんな
いっばい♥

それは...
そう...ね♥







お手間を取らせてしまい
申し訳ございません…

ほほよい

加減はどうじゃ？

はい♡素晴らしい
気分です
まら蔵さま♡

ああ♡雄々しい♡

私達が一生仕える
おちんぼ様…♡

体にも心にも
ドスケベと幸せが
溢れてきてます…♡



ん♡オナホ妖怪
としれ
生まれ変わった
私たちの全れを
捧げまひゅ♡

どうぞなんなりと
お申しつけ
くださいませ♡

びる
イロ♡

ベロ♡
ベロ♡





ご主人様♡



そうかこの屋敷
淫ら家は
いわばあやつの
結界

妖怪は力を
そがれてしまう



どうした?
鬼太郎

力が...
ぬけて...



ガク...



そういうこと♡

そして入った牝は
意識を改変され

やがて私達のように
マラ蔵さまの
オナホ妖怪に
堕ちるってわけ♡

ふふ 今の
鬼太郎なら
私でも殺せるかな♡



ねこ娘
まな：

あーあ
本当になんで
こんなやつ
好きだったんだろ

前の
ねこ姉さん
男の趣味悪い
ですよねw

こんな
チンチクリン
好きとか

うるさい
から



ボ

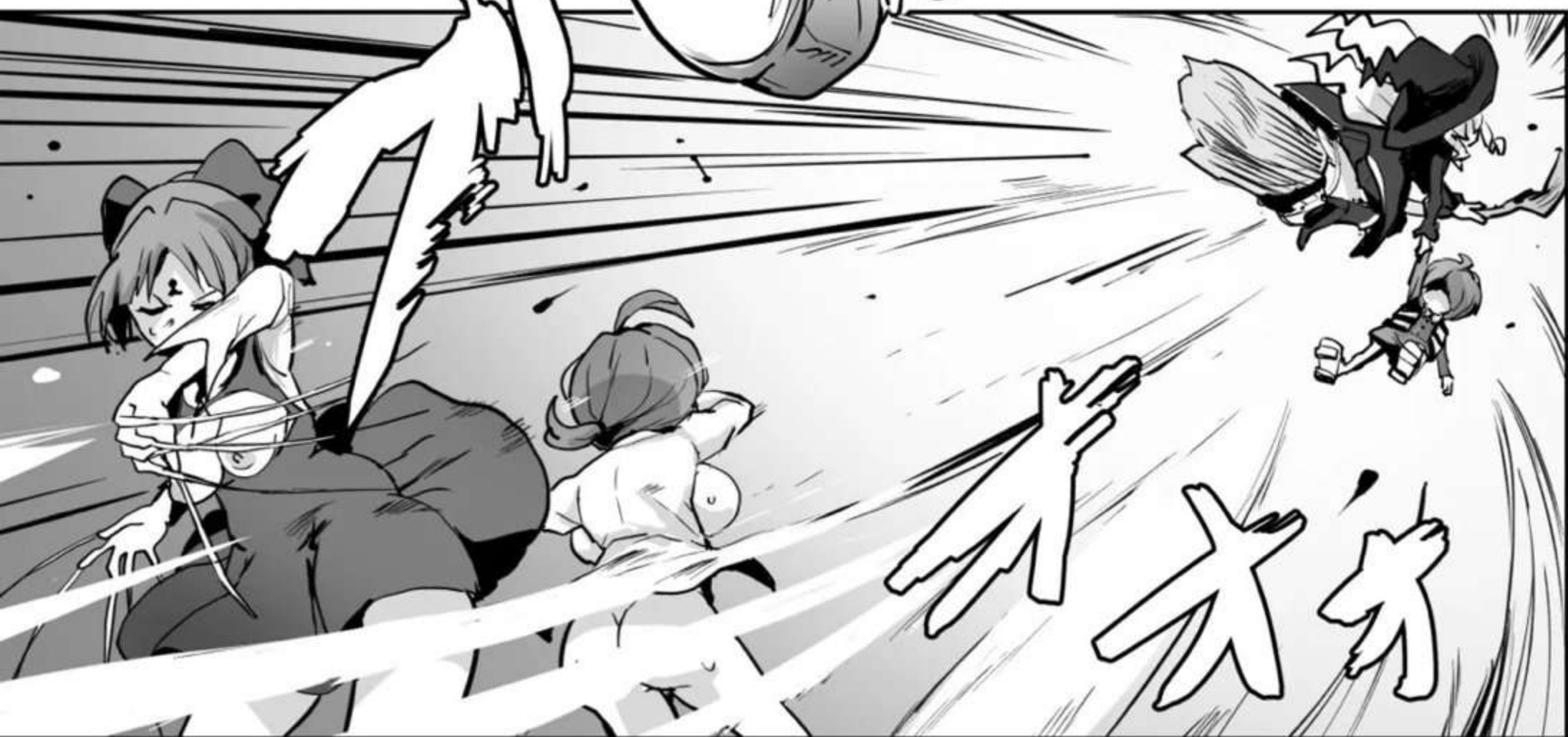


思い出して
気分悪いし

じゃあね
鬼太郎



鬼太郎







あつてる
なんかでる

うん
だせ♡

まな姉ちゃん
の中にでるっ

あッ

よいしょ♡

精子いっぱい
ビュッってでたね♡
気持ちよかった?

ぽ

ん♡



栄養満点
童貞シヨタ
たましい♡

いただき
ます

いっしょ♡



ふふ♡もちろん
気持ちよかった
よね♡

んふ♡

美味しそうな
たましいも一緒に
出てきちゃった
もん♡



あつる♡



いいのおりまなどの
スケベを通して体に
栄養が染み渡るわい

どれほど
食うた?



10人くらい♡

みーんな
たましい空っぽの
奴隷人形に
しちゃいました♡

ほほ
ワシのためか?

はい♡
いっぱい栄養付けて
早くお力取り戻して
欲しいから♡



嬉しいのお

マラ蔵様♡

存分に
イケ



新しい
お客人を
お連れしました♡

ゆ・ゆき
です♡

花子…
です♡

おんこ♡

おんこ♡

おんこ♡

おんこ♡

アッ

トッ



おお!!
ようやった
ねこ娘

後で
たっぷり
可愛がって
やろう

はい♡

二人とも
いらっしやい



まずはちんぽでも
しゃぶって
くつろいで下され

はい♡
大きひ♡

お言葉に
甘えへ♡
んぐゅう♡

ほほ
おかわりも
ありますからな

ホッ

んぐ



便器の
花子さん
じゃったか？

トイシ
トイシ…
おほっ

精子コキ捨て
イクっ

ほっほ具合が
良すぎて間違えた
わい



あんなに
喜んで頂けて
嬉しい



ゆきさんの
まんこは
こなれてるのお
やってますな

んあその
彼とお



今日もよう
来てくれたの

それでゆきさん
彼とのセックスは
どうじゃった？

んダメでした
全然イケなくて
これ知ってしまったら
あっイクきます

ご主人様

すき
すき



ふふ受けて
立ちます♪

なら次は
たましい
又キで♥



やるわね
まな
母親なんて

ねこ姉さんには
負けていられ
ませんから



精子
だせっ♥

ほらあんたも
だしなさい♥



♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡



♡♡♡♡♡



♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡



後でまとめて
美味しく食べて
あげるわね♡

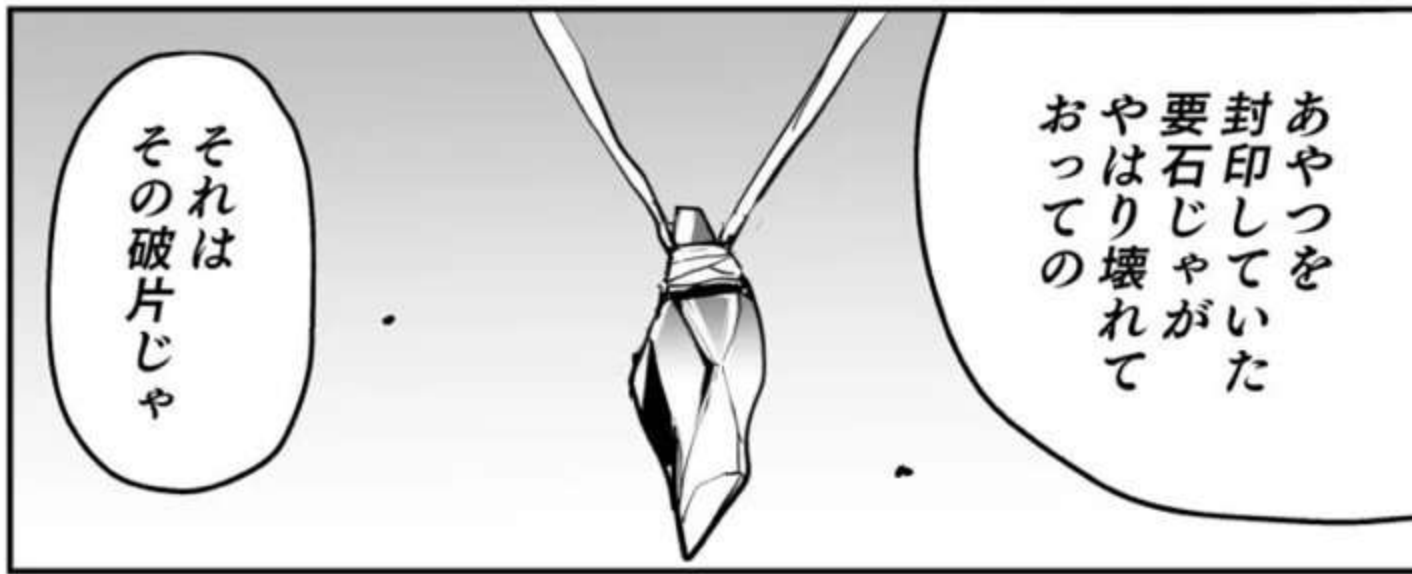
次の狩場
いくわよ♡
まな

はい♡♡
ねこ姉さん



ペンダント…

ああ



あやつを
封印していた
要石じゃが
やはり壊れて
おつての

それは
その破片じゃ



行こう
アニエス

父さんは
安全な
場所で

……



これをつけていれば
屋敷の力結界を
無効化できる
はずじゃ

一つを僕
もう一つを君に



アニエス？

？

あいつを…
大丈夫…

たおす
たおせる…
私は…

アニエス



許さないから

鬼太郎ッ



残念ですが
ここで...

マラ蔵さまの
邪魔は
させない♥



鬼太郎って
うざい

アニエスも
いつまで
そいつの
味方するの？

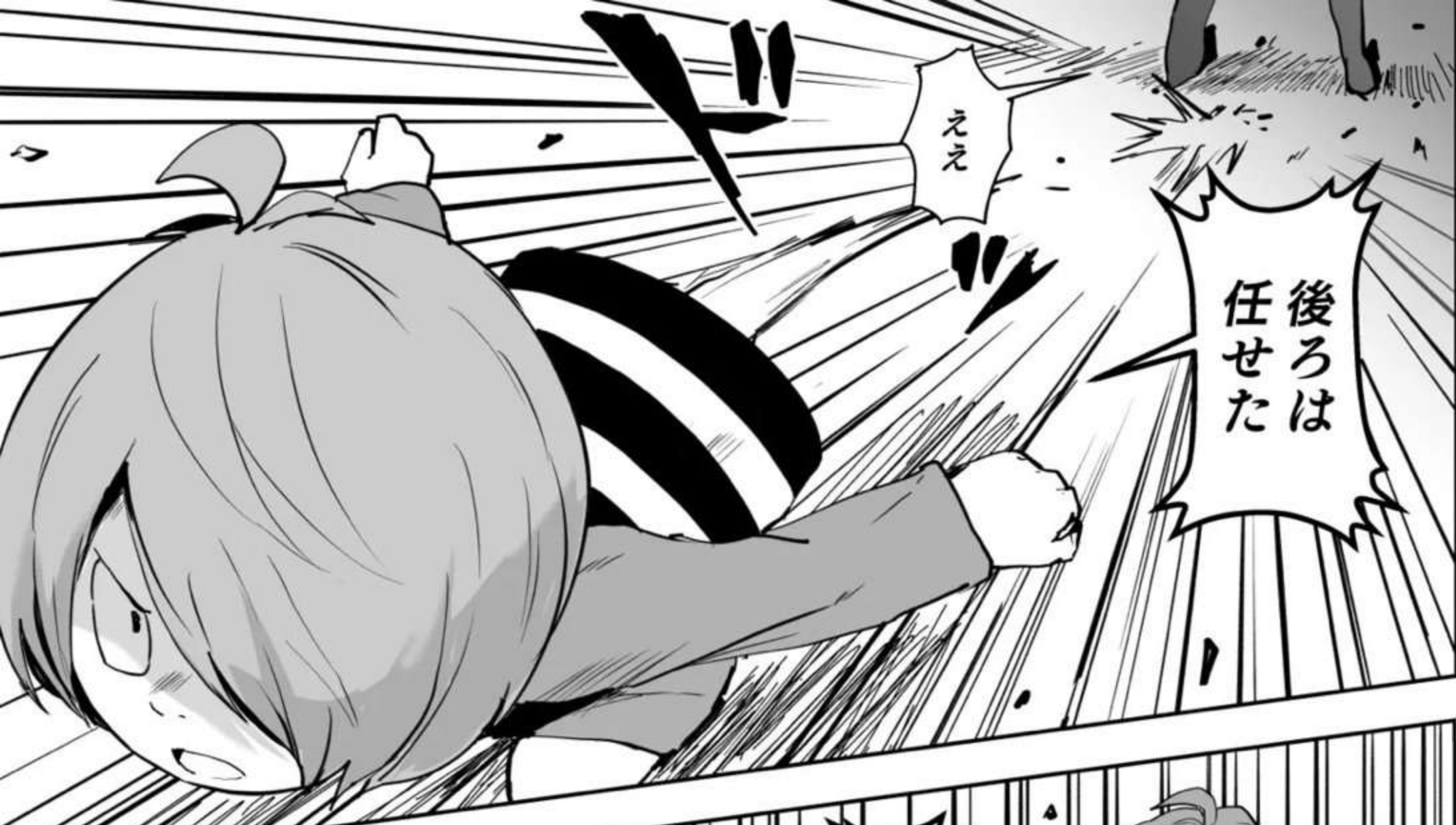


屋敷の力が
効いておらぬか
日が浅いお前には
荷が重い
下がとれ



アニエス

.....



ええ

後ろは
任せた



鬼太郎



ぬんっ



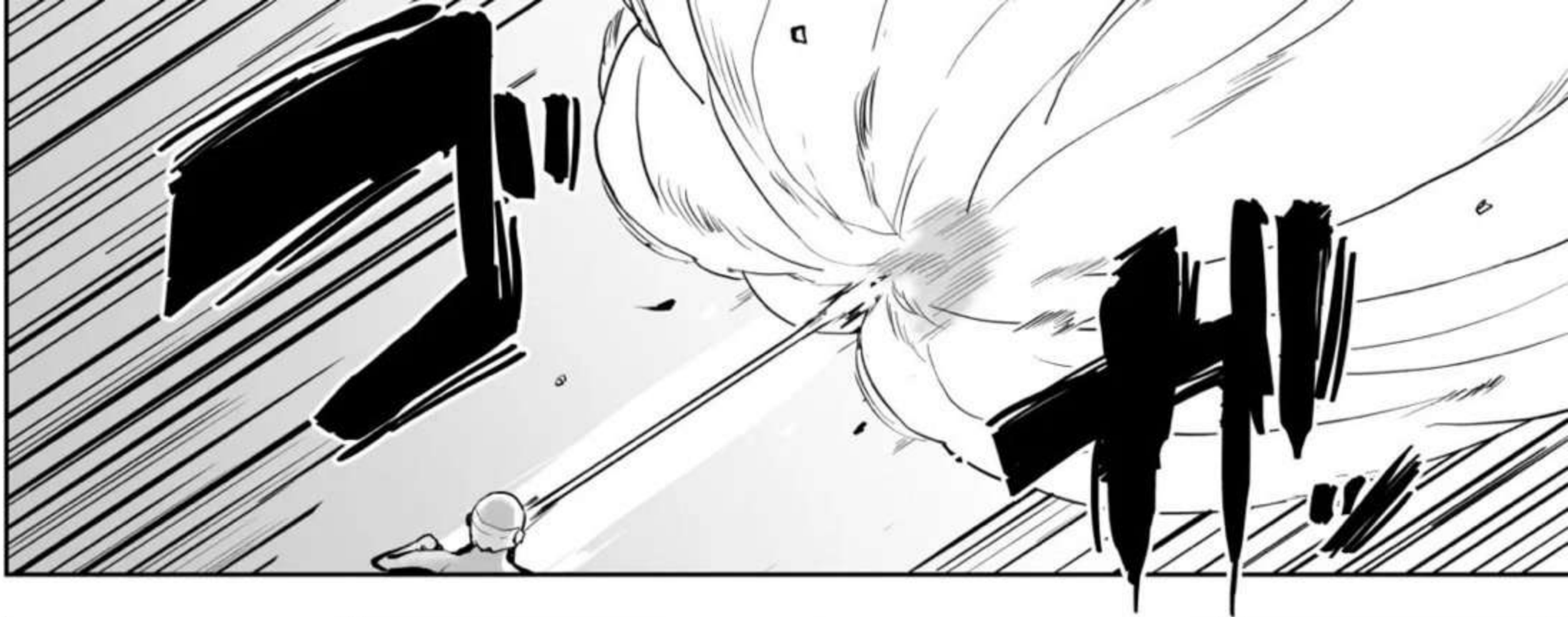
やりおるわい
小童

じゃが
力を取り戻した
ワシに勝てる
と思うな



にゃっ







ようやって
くれたの



しゅ
死か
全
死
ぬ
か
と
思
っ
た
わ
い



ふー
危
危
な
い
な
い

ガイ...



アニエス

はっ...

はっ...



寂しかったか？
ワシもじゃぞ

あっ！
おっ！



彼女はあの土壇場でようやく気づいたのじゃろうな

ワシがいなくなる事が
どういうことか



…あ
アニエスに何をした？

ほほ何をしたか…



つまり

んっ♡
乳首すき♡

コッ。

もう自分がワシなしでは



いられんようになつておるとな

許して鬼太郎私やっばりこの人は殺せない

本気で好きだって分かったの♡マラ蔵が♡

はあ♡
はあ♡



こういう屋敷では
一つ何か持って帰って
よいというのが
知られておるが...

へっ?

この淫ら家は
ちと違う
一たび入れば
持って帰らねば
「ならない」強制じゃ



即
下

そして
そうなれば
もう必然の
流れよの

火照った体は
ワシの
ちんぽを強烈に
求める

どれワシも
動こうか？

うるさい
黙ってちんぽ
出してれば
いいのっば

そろそろ
ワシのこと
好きになって
きたの
ではないか？

そそんなわけ
ないれしょ
調子のらないれ

屋敷にくるときは
常に精神防御
しておったようじゃが

らめ吐セグス
中らんぽ

イクワ
ちんぽ

身体が堕ちれば
心はおのずと
ついてくるもの

ほれ特製淫紋の
プレゼントじゃ
これでもっと
気持ちよくなるぞ

早くワシの
ものになれ



でどうじゃ？
ようやく素直に
なれてしゃぶる
ワシのちんぽは？

最高れす
うつま

もっろ
早くこうしれれ
ばよかつら



ならばまな達と
同じくワシの
牝に堕ちること
異存ないな？

はい♡ありまへん♡
まなと一緒に♡
マラ蔵様のひんぽ穴
妖怪にどうか…♡

よい返事じゃ
ではいくぞ

褒められた♡
愛してます♡

私を
変えへ♡



ああ

変われい
アニエス

ん♡
ん♡
ん♡

好き♡

好き♡



無様ね
鬼太郎

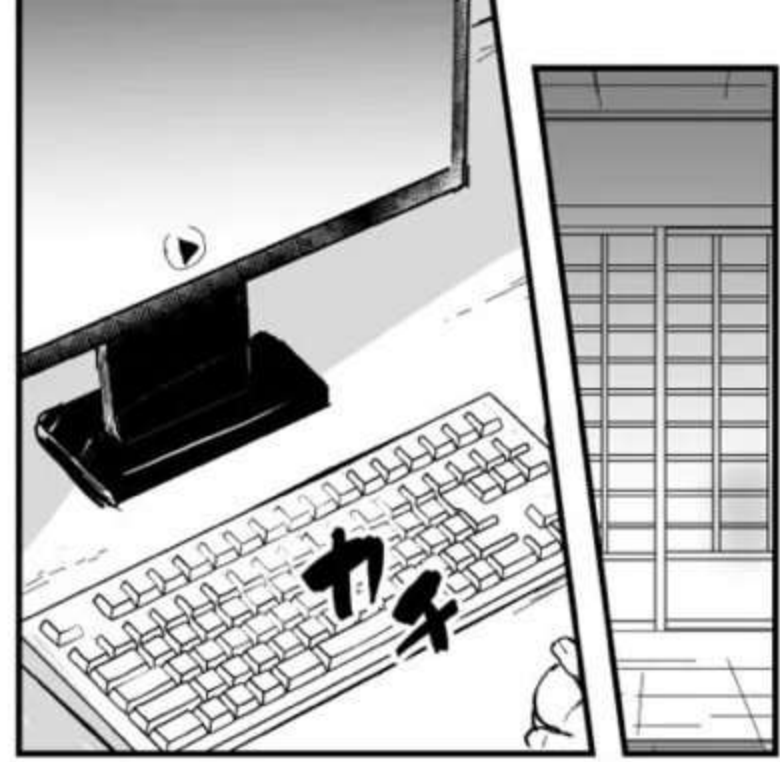
いたあ...

無事で良かった
ご主人様♡

心配かけたの

でもマラ蔵様♡
ご主人様を
殺そうとした罪
簡単に死ねると
思わないで

これから
もっと無様に
償ってもらおうから
ふふ♡♡♡





見れ揺っへ
鬼太郎♡

濃厚♡

マラ蔵殿の
精子で♡
いっぱい♡



ちゅぽん♡

んべえ♡
お褒めの
言葉あ♡

それに加えて
ちんぽ固め魔法
だもんね♡

シコシコしたさに
もういいなり♡



雑事
撮影に編集と
鬼太郎は
役に立つのう

アニエス
お主の精神制御
魔法見事じゃ

ガ
ー
ぬ
め
♡

伏せる

ちゅぽ♡



精子
わけへ♡

今日はこの前の
撮影のご褒美で
解除してるから

ふふ♡

絶対私達の
エロ動画で
シコってる♡



マラ蔵さま♡
お布団温めて
おきました♡

どうぞ
おはいり
ください♡

ほほ
気が利くの



親子牝布団は
いい心地じゃの

しゅき♡
敷布団に
されるの
しゅき♡

フッ好き♡
グッ好き♡



ふふ娘と一緒に
種付けセックス
最高：♡

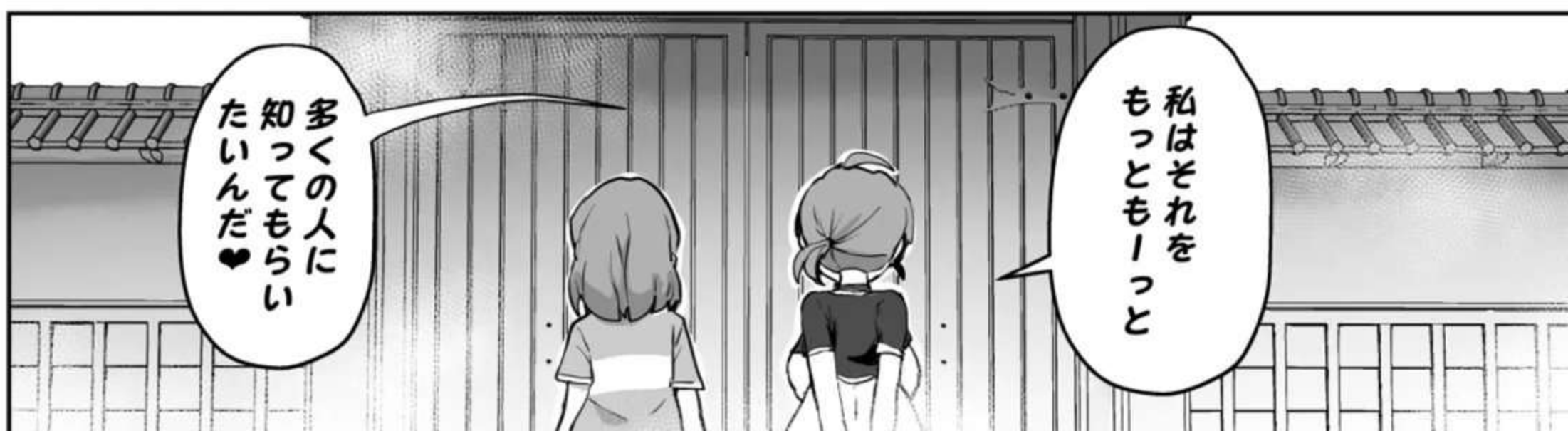
鬼太郎ほら
早くカメラ♡

いいなあ
お母さん♡

鬼太郎
いる？

ケツ穴
ケツイク♡







ぎい

助平

ようこそ

淫ら家へ♥

あん♥本当に
お父さんに似て
吸い方もドスケベ♥

終わり♥

吸血鬼の爆乳美尻ハーレムパーティー
〜墜落の誘いは曇天の闇の中で〜

日高久志

「反もめんも忙しく宙を飛び回っている。」

「何も起きないはずはあるまい。」

「見逃さぬことじゃ。未知の妖怪は雷や炎で襲ってくるとも限らんからのお」

「はい、父さん。」

ねこ娘も……気をつけて」

「え？私……？」

鬼太郎に名指しされて、ねこ娘は一瞬、戸惑った。

だが鬼太郎の本気で心配そうな顔を見て、大きく頷いた。

「わかってるわよ、大丈夫だから」

(き、鬼太郎も……)

ただの朴念仁じゃないんだ……

フツーに私のことを特別に想って……じゃああ……)

ねこ娘は一人、顔を赤らめた。

横から嬉しそうにまながツンツンと腰の辺りを突つつく。

ねこ娘は犬山まなのセッティングで、鬼太郎に告白してキスをしたのだ。

鬼太郎は告白の答えを返してはくれなかったが、こうしたらとした瞬間に意識してくれているのが、乙女心に嬉しい。

(き、鬼太郎も照れたりするの？)

ねえ……もっともっと……そういうところを見せてほしいな……)

ねこ娘は頬を上気させながら、秘めた恋に舞い上がっていた。

迫る脅威にも気づかないまま……

—————

「鬼太郎、どう？似合っているかしら？」

二週間後。

女子高生の制服を自慢気に着こなしながら、アニメスがワクワクしながら鬼太郎の前でターンしてみせる。

「……………」

「すごく可愛い〜！やっぱりアニメスさんくらいキレイだと何着ても様になりますね♪」

鬼太郎が困った顔をしているのに気付いたのか、犬山まなが慌ててフォローを入れる。

「わ、私はどうだ？鬼太郎」

アニメスの姉アテルも年甲斐もなく、同じ女子高生の制服を着て感想を求めた。

「うわっ……冗談きついぜ。」

西の空を覆う真っ黒な暗雲。

雨粒一つ零れていないというのに、その下にはどんよりとした暗闇が広がっている。

「父さん……あの雲は……？」

「良からぬ兆しじゃな……。儂らでさえ与り知らぬ悍ましい妖気を纏っておる」

鬼太郎と目玉のおやじは心配そうに、立ち込める黒雲を見上げていた。

雲はジワジワと迫ってくる。

「それで何が起るっていうんだよ。」

早く教えろって！

気が休まらねえじゃねえか……」

「逃げる準備をしようっていうんじゃないでしょうね、ねずみ男。」

毎回毎回、本当に最低……」

いつになく真剣なねずみ男にすかさず、ねこ娘がツッコミを入れる。

砂かけばあや、子泣きじいも空気を感取ってピリピリしていた。

聞くまでもないだろ？」

「シヤアアアツ〜〜！〜！」

思わず口を滑らせたねずみ男を、ねこ娘の容赦ない爪攻撃が顔を×に引っ掻いた。

「いえいえ♪本当によくお似合いですよ♪
このまま私と一緒に二人共、学校に通っちゃいますか？」

場を和ませようと、犬山まながアニエスとアテルを茶化す。

二人が着ているのは、まなが用意した学校の“制服”だ。

まだ梅雨も迎えない季節だというのに、制服の改訂があったのだという。

予備のものを二人に着てもらったという訳だ。

3人が着ているのは黒いインナーの上に白い夏服を纏ったデザインをしている。

制服というには風変わりな格好だった。

「その制服、これからの季節暑くないの？」

その肌にピッタリとしているって…」

「大丈夫ですよ♪今の素材って汗を吸い取ってくれるから、快適なんです♪

この制服は、新しく赴任してきた根津先生が提案してくれたんですけど…

本当にすごい先生なんですよー！

生徒想いで……♪いっつも私達を見つめて愛し

てくれるんですから♪」

まなが首元を擦りながら、ウツトリと微笑む。

「いい先生なんだ。

まなも元気なさそうだったから良かった」

雲が空を覆って、街から太陽を奪って数週間。

それでも草木が枯れることはなく、今のところ日差しがない以外の実害はない。

アニエスとアテルが駆けつけてくれたように、この暗雲が西洋妖怪の仕業だということは分かっている。

しかも街に潜伏しているのも確実だ。

だがその正体は要として知れなかった。

まなも不安そうにしていたが、最近では学校で楽しいことがあったようで、ウキウキしている様子だった。

「本気で行きましようよ。

ねこ姉さんも。一緒……学校に通って先生に色々教えて貰いましよう♪」

まなが舌舐めずりをしながら、ねこ娘を誘う。

僅かではない違和感。

妖気は感じないが、女の勘が何か引っかかる。

「わかったわ。迷惑でないのなら」

唐突な誘いをねこ娘が請けたことに、「やったあ♪」とまながはしゃぐ。

「ぞ、それなら私達も…」

とアテルが真っ赤な顔で割り込んできたことで、さらにその場は談笑に包まれていた。

—————

「やっぱりおかしいじゃない！

この学校も！まなもっ！……あの男だつて……！」

フーッ！フーッ！と荒い息を吐きながら、ねこ娘は校舎裏に隠れていた。

どんよりとした空の下、さらに薄暗い建物の壁を背にしながら辺りを見回す。

(き、鬼太郎を……呼ばないっ！)

ねこ娘は首元を手で抑えながら、自分の不甲斐なさに泣きそうになっていた。

—————

1時間前。

まなと一緒にやってきた学校の校門には、一人の男が立っていた。

根津。

見るからに怪しげな中年の男だが、その周りには女の子達が群がり黄色い声援を浴びせていた。

「あ、根津先生♪おはようございませう♪
朝一で根津先生のお顔を見れるなんて、私幸せですう♪」

走り寄って媚びるまなに、ねこ娘はただ驚いた。

（こ、こんなつ……！
ねすみ男モドキにまなが入れ込むはずがないでしょ!?!）

根津は出っ歯がなく、禿げていない……
七分分け、丸眼鏡という特徴の違いはあれど、
面長のねすみ男そっくりの容姿をしていたのだ。
人は見た目じゃないと言うが、さすがに抵抗のある姿をしている。

ねこ娘が戸惑っていると根津先生はツカツカと歩み寄って、彼女のお尻を自然な仕草でパンツと打った。

「おお、良い音の鳴る尻じゃ。
たまらんのお」

「な、なにをしてっ……!?!」

つい反射的に爪を出して、引っ掻こうとしてしまふ。

だが相手は人間だ。
ねこ娘は寸前で踏みとどまった。

「んん?お前は“制服”を着ていない……のか。
つまりウチの生徒ではないと……ふむう……
きつとそのスレンダーボディに“制服”は似合うと思うのだが」

「な、なに?ここに来ちゃいけないって言うの?」

いくら生徒が一緒にいるとはいえ、部外者が我が物顔で登校するのはさすがにまずいのかも知れない。
ねこ娘も根津の舐め回すような視線に、不快感を隠せないながら強くは出れない。

「かまわんよ。
見学していくといい。入学したくなったら“制服”を受け取りたまえ。
きひひひっ!素質があるぞっ!その尻は存分になあ。
後は……残念な乳だけじゃなっ!」

「っ……!?!」

両手で握るような仕草をして笑う根津に、ねこ娘は咄嗟に飛び退く。
胸を揉まれる想像が頭をよぎって、本当に不愉快極まりない。

敵意むき出しなねこ娘に警戒したのか、根津は不敵な笑みを浮かべたまま女の子達を引き連れて、校舎の中へと消えていった。

「お尻……褒めて貰っちゃいましたね♪
きつとねこ姉さんだったら……根津先生のお眼鏡にかなうと思ってました♪」

お尻をフリフリと振りながら、まなが我が事のようにしゃべり出す。

「あのセクハラオヤジに気に入られたって、嬉しい訳ないじゃないっ!」

ねこ娘は腹が立ってしょうがない。
まなは「まあまあ」となだめると、「あ、そうだ♪もう学校に入ったなら……」と制服の胸ボタンをいきなり外した。

「えっ!?!まなっ……!?!」

黒いインナーに覆われたおっぱいが、制服から溢れるように飛び出した。
明らかに今までのまなとはまったく違うビッグサイズのおっぱいがはちきれんばかりに、たわわに揺れる。

「えへへっ♪いいでしょお♪
根津先生が揉んでくれたから……こんなに大きくなったんですよ♪」

まなはおっぱいを下から手で跳ね上げながら、誇らしげに笑う。

「インナースーツが普段は抑えてくれているん

ですけど、窮屈で…

かといって、いきなり大きくなったら、不審がられるから隠しておけて先生が。

だから学校に来たら、こうして自由に出来るんです♪」

ユッサユッサと揺らして喜ぶまなに、狂気すら感じる。

ねこ娘はまなが何かの妖怪の暗示にかかっているのだと、直感的に感じた。

(この学校にあの雲と関係のあるヤツが！)

西洋妖怪!?!…セクハラオヤジ!?!

どっちにしても、まなにこんなことをしてタダで済むと思わないでっ!)

考えを巡らせているねこ娘に、まながおっぱいを揺らしながら覗き込む。

「実は母乳も出るんですよ♪

♪ 先生は甘くて美味しいって褒めてくれるんですよ

♪ ねこ姉さんも欲しくなっちゃいました?

母乳の出るテカパイ♪」

ピュルウ……ピュルピュルッ……♪

インナースーツの胸部分はおっぱいを避けれる構造になっていて、露わにした乳から勢いよく母乳がねこ娘に降り掛かった。

「にゃにゃっ!?!だ、誰がっ!?!」
まなっ!アンタ、おかしいわよっ!?!」

「どうしてですか?

♪ この学校の生徒は皆……キキキキッ♪
♪ お乳を吹くのが大好きなんですよおっ♪」

まなが邪悪な暗い笑みを浮かべると同時に、

周りの女子達も同じように「キキキキッ♪」と笑って乳を放り出している。

自分が囲まれている。

ねこ娘は畏に飛び込んだ事を自覚した。

多分、まなも含めて被害にあった子達は、西洋妖怪を倒せば元に戻るだろう。

だから傷つける訳にもいかない。

(け、結構な人数がいるわね。

♪ だけど……人間相手なら……)

「キキキキッ!……隙だらけだぞ」

「っ!?!」

まな達に警戒しすぎて、ねこ娘は背後を取られたことに気づかなかった。

根津はねこ娘の首筋に牙を突き立てる。

「あっ……ぐうっ……!?!」

不覚を取った。

だがねこ娘も負けてはいない。すぐに根津を肘で押して、離れたところに強烈な蹴りを繰り出した。

囲まれている状況では、もっと危険なことになりかねない。

ねこ娘は断腸の思いで、その場から走り去った。

—————

そして今に至る。

(鬼太郎達に伝えないと!)

♪ 吸血鬼なら……私も……)

首を噛まれてしまった事は痛恨事だ。

西洋妖怪の吸血鬼とは前に戦ったことがある。

バックブアード配下のカミーラだ。

その時は噛まれずに済んだが、餌食になったね

ずみ男達は吸血鬼と化して下僕になっていた。

「まだ自由が利く内に……

♪ なっ!あくうっ……!?!」

身体が熱く火照って落ち着かない。

吸血鬼化しているからだろうか?

絶望的な状況だが、意識が保てる内に脱出しな
きやいけない。

「えっ……?」

無理に動かこうとした身体がやけに窮屈に覺えた。着慣れてフィットしているはずの洋服のタイが苦しい。

ワンピースの肩紐が肩からずり落ちてしまう。

「じ、これって……まなと同じっ……?」

ねこ娘は恐る恐る自分の胸を見下ろす。

その瞬間、シュルツ!とタイが弾け飛び、たわわになったおっぱいが剥き出しになってしまった。

ワンピースの上に乗ってプルプルと揺れる。

スレンダーボディの可愛いねこ娘とは真逆の小品なデカパイが放り出された。

思わず両手ですくい上げて、一生懸命ワンピースの中に押し込む。

「にゃあっ……!こんなの鬼太郎……にみ、見せられないっ……!」

羞恥心でねこ娘は顔を真っ赤にして蹲る。

「どうしての?ねこ娘。

具合でも悪いの?」

聞き慣れた声に思わずねこ娘は顔を上げた。

制服姿のアニエスが心配そうに覗き込んでいた。

「ううっ……アニエスは無事なの!?!早く鬼太郎を呼んで……」

ジワッ……

アニエスの元から大きなおっぱいが、さらに大きく視界を遮る。

しかも制服に乳首が浮き出て、母乳が染みを拡げはじめていた。

「んんっ♪この制服のままだと染み出しちゃうの。ちゃんとインナーを着なきゃ……つい漏れてしまっうわ。

でもお……このお乳の甘い香りも好きだから。このままでもいいんだけど……ね。

その様子だったら、ねこ娘ももう……だったなら殊更隠す必要はないわね。

そう思わない?ねこ娘。キキキキッ……♪」

妖艶に笑うアニエスの口元には、犬歯が覗く。

「あ、貴方までっ……!」

手を延ばそうとするアニエスに、ねこ娘は咄嗟に跳ね退いた。

「違うわ。ねこ娘。

皆よ。この街にいる女性は……皆、ご主人様の虜♪」

「知らなかったのは、ねこ娘だけ♪キキキキッ……♪」

雪女のゆきと、トイシの花子さんがお揃いの“制服”姿で迫ってくる。

「貴方を捧げて、ご主人様の寵愛を受けるのは私よ!」

まななんかに渡さないんだから♪」

「そのツリ目がコンプレックスなら私が直してあげようかい?」

キキキキッ……♪ご主人様の好みじゃないスタイルのいい女は皆、私が直してあげているのさ♪」

ハリウッド女優になった房野きららと、妖艶なずんべらも、似合わない“制服”姿でおっぱいとお尻をフリフリしてアピールしてくる。

「ねこ娘、まだ鬼太郎なんかには操を立てているの?」

つまらない娘ね。ご主人様以外の馬鹿オスで良かったら、捜してあげるわよ♪」

「首を長くして待ってたよ、ねこ娘♪

砂かけはお呼びじゃないからねえ……残念だよ。私はほら、こうして美しいからお眼鏡にかなったって訳さ♪」

鬼太郎を好きだったはずの沼御前が、二本足で

立って煽ってくる。

和服姿が美しかったらろくろ首と合わせて、イヤ感じの“制服”姿はなんとも似合わない。

「違和感があるのか？」

何歳になっても、ご主人様が認めてくれる限り、この格好でいたいものなのだ。
お前もすぐに……その気持ちがわかる」

「そうよ。娘が教えてくれたわ。」

「ご主人様に求められることが、何よりも幸せだ
って……」

キキキキッ……♪」

アデルとまなの母、純子が背中合わせて手招き
していた。

全員が目が赤く染まっていく。
そして肌も白くなり、人間も妖怪も同じ“化物”
になっているのが分かる。

誰も彼もが爆乳を晒し、お尻を艶かしく振って
いた。

キキキキッ……！

同じ笑い声が、同じ牙を持つ邪悪な笑顔から溢
れてくる。

「どうだね？ねこ娘。」

おまえも私のものになり、この学園に足繁く通
うといい。
彼女達のように私が可愛がってやろうぞ。

キキキキッ……！

女吸血鬼達の中を悠々自適な足取りで、根津が
現れた。

マントを羽織っているが、何も着込んではいな
い。

全裸でイチモツをおっ勃っている。
完全な変態だ。

だが周りの女吸血鬼達は一樣に、生唾を呑んで
ウツトリと頬を染める。

「来たわね、変態っ！」

まなだけじゃなく、皆をこんな風にした罰は受
けてもらうわよ。
私は最後の一人になっても……」

「まずはその涎をどうにかしたらどうじゃ？
キキキキッ……！はしたないお嬢さんだ」

「っ！？」

ねこ娘は自分の口元を思わず腕で拭き取って、
驚愕していた。

地面にポタポタと零れ落ちるほどに涎が無意識
に垂れていたからだ。

「だが仕方ない。」

私の眷属になった者が私の巨根を前にして、平
気でいられる訳がないからのお。
欲しいのだからっ？ならそのままむしゃぶりつく

といい。

私の中出しを受ければ、お前は吸血鬼として完
成するのだから」

「な、中出し……！？」

「そうそうっ♪私達は皆、ご主人様に中出しを
おねだりして吸血鬼奴隷になったんだよ♪
すごいんだからあ……ご主人様の中出し♪
身体の中から変えられちゃってる感じが素敵い
……♪キキキキッ……♪」

まなが自分の犬歯を撫でながら、お腹をさする。

「ゴクッ……とねこ娘は生唾を呑み込んでしまう。
根津を挟むように、爆乳を放り出したアニエス
とアデルの姉妹ががむ。

根津は頬に当たったおっぱいに厭らしい顔をし
ながら吸い付いた。

「ジュルうっ……私はお。血を見るのが嫌い
なんじゃよ。」

だからこうして母乳から力を戴いている。
いいだろう？私から妖力を授ける時は、ほれ。
ここからじゃ。精液も母乳も元は血が源だから
のっ！」

「いらないって言ってるのっ！変態っ……！」

ピクピクッと下品にイチモツを揺らす根津に、
ねこ娘は精一杯の声を張り上げる。

だが目を離せない。涎も抑えきれないのか、唇

「くくくっ！だがお前に合わせてやるのも疲れのお。」

牝奴隷の方が這いつくばるべきだからな」

「あぐうっんっ……！えっ……」

根津はねこ娘の口からイチモツを引き抜くと地面に降り立った。

ねこ娘はイマラチオの苦しさから開放されたのだ。

反撃のチャンスだ。敵は目の前で無防備である。

ねこ娘は即、行動した。

すぐに四つん這いになり、自分から啜え込む。

「じゃふうっ♪んんぶっ……うじゅるうっ

♪」

「実に酷い有様だ。キキキキ……」

メス猫はどうやら発情期のようですよ。」

しかし残念ながら、本当に美味しいのは中出しで摂取する私の精液。

おしゃぶりで味わえる快樂とは比べ物にならない

「じゅぼじゅぼっ♪おおっ……♪

なあ……中出し……♪」

ねこ娘は目を細めて、お尻を嬉しそうに振る。おしゃぶりするスピードも激しくなっていく。

「そおですよ、ねこ姉さん。」

キキキキ……！ご主人様の中出しは私達吸血奴隷にとって、最高の褒美なんですから♪
ちゃんとお願ひしてえ……自分からマンコ穴を掘らないですよ♪」

いつの間にか周りに群がっていた吸血奴隷達の中から、まなが嘔きかける。

（じゃあっ♪最高の褒美……♪

わ、わかるう……！だっっておしゃぶりしてるだけ

でえ……こんな気持ちいいもの……

だったら……んんぶっ……♪

で、でも中出しされたら……わ、わたし……）

ねこ娘は根津やまな達の言葉を忘れていなかった。

中出しされてしまったら、根津の眷属として完全な吸血奴隷になってしまう。

まな達を助けられなくなる……

（その……どこがいけないの？

じゃああっ♪おチンポお……♪

絶対に鬼太郎のよりも大きくて男らしいおチンポお♪

お、おねだりしたらあ……おねだりするだけでえ

……ハメて貰える！

おチンポ！“ご主人様”のおチンポ……！

ねこ娘の思考が歪む。ただ啜えこんでいる根津のイチモツに支配されていく。

そしてチュパッ♪と涎の糸を引きながら、唇を離れたねこ娘は根津のチンポに頬ずりをして上

目遣いをした。

猫なで声で無様に浅ましく……おねだりをしたのだ。

「じゃあんっ♪さっきまでえ……分からず屋い、

ごめんなさい……

欲しいですうっ……♪精液を……オマンコに……

いいっ♪

取り返しがつかなくなってもいいから……

ううんっ！違ううう♪そうしたい……♪

まな達みたいになつてえ……！ご主人様に愛されたいですううっ♪

私のお初めてを……奪ってくださいっ！ご主人様あ♪」

屈服宣言に等しいハメ乞いに、根津はクイツと顎をしゃくる。

顎をしゃくる。

「猫なら腹を見せるのは屈辱かのお。」

許せない辱めじゃな。そんなことはお前が一番わかっているだろうが、な」

根津の煽りに、ねこ娘の顔がパアと明るくなる。

そして地面に仰向けで寝転がると足を大きく掲

げて、愛液でグチャグチャの下着を指ですらし

て恥丘を露わにした。

「こ、これで宜しいですかっ！

これで……にゃっ……！あああっ……来たあっ♪」

躊躇なく服従の姿勢を見せるねこ娘に

満足した根津は覆いかぶさるとそのまま突き入られた。

ねこ娘は根津の頭に手を回し、足を絡めだしいゆきホールドの姿勢を取る。

濡れそぼったオマンコがピストンに合わせて、ジュプジュプと卑猥な水音を響かせる。処女穴を捧げたとは思えない激しいセックスだ。

「おほおおっ♪しゅごおっ………!!
こんなにいっぱいっ!!ふにゃああっ♪」

「キキキキッ………!!
まなから聞いたぞ。

お前は鬼太郎とかいう青二才を好いているとか。だから私の牝を惹きつけるフェロモンにも抗っていた。

この町を覆う雲には大嫌いな太陽を妨げる以外にも理由があった訳だ。

他の牝どもはイチコロだったがお。

そんなお前が鬼太郎を裏切り私になびく……
素晴らしいじゃないかっ!

選べっ!私か鬼太郎かっ!」

「にゃふうっ!!んんくっ………♪
鬼太郎か……ご主人様あっ……

そんなのお……おおおっ♪」

グチュグチュと周りで掻き回すような水音が聞

こえる。

まな達が牙を剥き出しに微笑みながら、立ちオナニーを始めていた。

当然、母乳も盛大に吹き出しているから辺り一面が淫欲で染まっているように思えた。

そしてねこ娘はまたスノ♪と鼻を鳴らす。

心地よかった。
さっきまで恐ろしく感じていた乳の匂いが、とても幸福に感じられた。

“ご主人様”が与えてくれた喜びだからだ。

「決まってるううっ………!!
決まってますっ♪ご主人様を選びますっ♪

だっっ………!!だっっ………!!
鬼太郎じゃきつと……満足出来ないからあっ

……♪

中出しお願いしますううっ♪

私にトドメをさしてええっ………♪」

「いいだろうっ!!この街で最後の牝として派手にイキ散らせっ!!」

仰け反る根津に持ち上げられ、ねこ娘の体が宙を舞う。

足を絡み付けたままのねこ娘は、豊満に変わったおっぱいを振り乱しておねだりを続けた。

「ザーメンくださいいっ♪

にゃああっ!!このままイカせてええっ………♪」

「出すぞおっ!!」

「おおおっ………!!」

ドピュルウウッ………ドピュドピュッ………!!

「あひいっ………♪おほおおっ………!!」

注がれた精液の熱さに悶えながら、ねこ娘も盛大にピュルピュルと母乳をまき散らす。

それはまるで雨のように、根津に降り注ぐ。

根津は顔についた母乳をペロリと舐めながら、腰に力を込め残りの精液も余すところなく膈内に放っていった。

吸血鬼の源。血の盟約が果たされた証を。

ねこ娘の手足がダランと力なく垂れ下がった。

根津はまだ勃起し続けるイチモツで彼女の身体を支えながら、「どうだ?気分は?」と尋ねる。

「はあいっ……♪最高の気分ですっ………♪」

ねこ娘が反射的に返すと、身体を起す。
ニタァと邪悪に笑うねこ娘の目は赤く染まっていた。

そしてまな達とお揃いに肌も白く変わっている。

「キキキキッ……！」

「ご主人様っ……♪この体勢のままならあ……
おっぱいが吸ってもらいやすいと思うんです
っ♪」

「ほおっ！さっそく気付いたか。
感心だのお。ねこ娘」

「じゃあっ♪お褒め頂きありがとうございます
っ♪」

ねこ娘は漏れ出す母乳を隠すことなく、身体を
根津に密着させた。
再び根津の頭の後ろに手を回す。

根津は躊躇することなく、おっぱいにむしゃぶ
りっく。

「じゃふううっ♪ご主人様のおっぱいねぶりい
……！」

気持ちよすぎさう……♪」

嬉しそうに微笑むねこ娘は、お尻をフリフリと
しながら次の射精を促す。

底なしの中出しおねだりの予感に、根津は少し
苦笑しながらも、美味しい母乳に舌鼓を打つ。

街から乙女はいなくなった。

この雲の下にいるのは、根津に服従し人間や妖
怪を辞めた吸血奴隷だけになった。

「「「キキキキッ……！」「「「

赤く光る眼と、不気味な笑い声だけが響き渡る
地獄で、ねこ娘は生まれ変わった幸福に酔い痴
れていた……

—————

「だ、だめだ……
父さんが動かない……」

鬼太郎はどんよりと暗い街の片隅で、肩を落と
していた。

しなびた目玉の親父は、目を閉じたまま微動だ
にしない。
妖力を失い、休眠しているようだ。

そんな鬼太郎自身もやせ細り、かつての力はも
うない。

「鬼太郎？出歩いたら駄目じゃない。

ふふっ♪吸血鬼に襲われちゃうんだから」

足取りも軽く、ステップを踏みながらねこ娘が
駆け寄る。

黒インナーの“制服”姿の彼女を鬼太郎が見上
げた。

「わかってる……

でももう……動けないんだ……

ねこ娘が西洋妖怪の正体を教えてくれたって
うのに……」

「残念ね、鬼太郎。

そして無様♪キキキキッ……ご主人様の足元に
も及ばないわ」

ねこ娘の目が赤くランランと輝く。

「ああ……」

鬼太郎は思わず目を反らし、俯いた。

ここ数日の間に妖気を吸い取られた鬼太郎は廃
人寸前だった。

頼みの綱の目玉の親父も同じ有様だ。
戦う気力も、体力もない。

どんよりとした雲の下で頂垂れている。

だから一番の味方のねこ娘が“吸血鬼”になっ
てしまっているなんて考えたくない……

その卑屈さもねこ娘が暗示で植え付けたとは鬼
太郎は夢にも思わなかった。

ただ「違ってほしい」と願うばかりだ。

「キキキキッ……！……！」

その微かな希望が、出がらしの鬼太郎の価値だ
もんね。

ほらっ！足で手伝ってあげるから……無駄打ち
して、残りの妖気を吐き出しちゃいなさい♪」

ねこ娘は鬼太郎の股間を足でぞんざいに弄る。

血を首から吸う代わりに、こっして射精される
ことで、妖気を奪うのだ。

鬼太郎も本当は分かっている。

ねこ娘がもう……

顔を上げられないまま、鬱勃起してしまう。

「しゃぶってほしい？鬼太郎」

頭の上に何かがピチャピチャを降り注ぐ。

甘い香りが鼻にかかる。

答えることができない。

されたら見てしまおうだろうか……

ねこ娘の邪悪な笑顔から出た吸血鬼の牙を。

だから…何も言えない。

バサバサと羽音が聞こえる。

その音が聞こえるたびに仲間が消えていく。

一反もめんも、ねずみ男も連れ去られた。

キキキキッ……♪と笑い声が鳴り響く。

その時だった。黒いインナーを着ていたねこ娘

の足が、白い肌を露わにしていたのは。

思わず鬼太郎は顔を上げてしまった。

ねこ娘が元に戻ってくれたような気がして。

「キキキキッ……♪」

鬼太郎、なんて情けない顔♪」

嘲るねこ娘は宙を舞うまなやアニエスとお揃いのマント姿になっていた。

裸に羽織る黒い蝙蝠のようなマント。

真っ赤な目が歪み、口元から牙が覗く。

分かっていた。順番が来たのだ。

ねずみ男たちが連れ去られた場所へ…送られる

……

「ああ…しゃぶってほしい……」

力なく笑う鬼太郎にねこ娘はまた邪悪に微笑む

と、牙を舌で舐め回して手を差し伸べる。

けっして取ってはいけないその手。

見上げたねこ娘の後ろの空で、雲がどんとど

と拡がっていく。

その雲がいずれ世界をも喰らい尽くすことを止

められない。

ねこ娘のマントが大きく翻り、爆乳美尻の裸体

とより深い闇が目の前を覆い尽くす。

吸血鬼達の大好きな夜がその中には永遠にある。

鬼太郎はその中に消えていく。

手を引かれて、逆らうこともなく。

ただ闇に堕ちて喰らい尽くされる為に。



あとがき

ねこ姉さんとまな堕ち本！
お手に取って頂きありがとうございます！
本当にアニメ見ながら滅茶苦茶描きたくなくて
こうやって形にできて改めて良かったなと思っています！

6期に迷い家のお話ないので元ネタにするのは
どうなんだろう？とか、
アニメ見返してそういえば雪女は冬にしか人間界
来ない設定だったと後から気づいたり…
まあ、突っ込むところはあるかもですが楽しんで
もらえたら嬉しいです！！

鬼太郎は本編でも洗脳や催眠要素、妖怪化とか
多くてそっち方面でもすごい楽しめて改めて
最高！！

そして、もう早いもので今年も最後！！
とにかく来年も精一杯頑張っていきますので
よろしければお付き合いくだされば嬉しいです！！

では、少し早いかもしれませんが、皆様、良いお年を
お迎えください！！

さなつき

奥付け

- 発行・著者 さなつき
- サークル アヘアジフ
- Email neko998-aheaji@yahoo.co.jp
- Pixiv 41042507
- Twitter @sanatuki0510
- 印刷 ねこのしっぽ様
- 発行 2024/12/30 コミックマーケット105

吸血鬼の爆乳美尻ハーレムパーティー
～墮落の誘いは曇天の闇の中で～：

- 著者 日高久志
- pixiv <http://pixiv.net/users/4853918>
- ノクターン <http://xmypage.syosetu.com/x8371q/>

日高さん
いつも寄稿文本当に
ありがとうございます！！
感謝！！

**制作
アヘアジフ**

**この作品は
二次創作であり
原作とは一切関係ありません**

複製を禁止する